21　次の文章は、前漢時代のという人物が、官職を退いた後、郷里に帰って余生を過ごしている場面を記したものである。これを読んで、後の問に答えよ。（出題の都合上、本文や訓点を省略した所がある。）　　　　　　　　　　〈岡山大〉二〇二三年度出題

　広　　二 郷　一、　三 注一共　　二 酒　一、二 族　人　故　旧　賓　一、　相　娯　。① 三 　　　余　　二 　一、 　　共　。 歳　余、　子　孫　 下 注二昆　弟　老　　　二 愛　一 上 、「今　日　飲　　費　レ 。   
注三二 丈　 所一、②　レ 　中 田　上。」老　人　 二 注四間　　一 ア為レ 　二 此　一、広　、「③吾　　　　不レ 念二 子　孫一 哉。 　二 注六　一、三 子　 勤二— 　　一、三 　二 衣　一、与二 凡　人一 。 今　　増二— 　一 　二   
注七　一、　二 子　 注八怠　一 イ耳。 而　レ 財、　二 　一、 而　レ 財、　二 　一。　　富　者、衆　人　之　怨　也。吾　　三 　教二— 　子　一、不レ　下 二 　一 而　  
上レ 。又　　金　者、注九聖　 ウ所三— 以　恵二— 　老　一 也、　 与二 注十郷　党　宗　族一 　二 　一、　二 　余　一、  
④不二 　一 。」エ於レ 是　族　人 注十一　。　　　（『漢書』による）

注一　共具＝用意する。

注二　昆弟＝兄弟。

注三　従丈人所＝あなた方から。

注四　間暇＝ひま。いとま。

注五　老＝おいぼれる。する。

注六　田廬＝田畑と家屋。

注七　贏余＝あまり。余分。

注八　怠堕＝怠惰。

注九　聖主＝皇帝。疏広の退職時に黄金を贈った。

注十　郷党宗族＝同郷・一族の人々。

注十一　説服＝よろこんで納得した。説は悦と同じ。

問１　二重傍線部アイウエの読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で答えよ。現代仮名遣いを用いてもかまわない。

問２　傍線部①を現代語訳せよ。

問３　傍線部②について、疏広の子孫はなぜこのように勧めようとしたのか、説明せよ。

問４　傍線部③をすべて平仮名で書き下し文にせよ。現代仮名遣いを用いてもかまわない。

◎問５　傍線部④について、疏広はどういうことを「不亦可乎」と言っているのか、本文に即して説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ア＝ために　　イ＝のみ　　ウ＝ゆん　　エ＝ここにおいて

問２　Ａ疏広はＢ家人にＣしばしば 疏広の家に 金の残りがまだどれくらいあるかを尋ね

Ａ＝２

Ｂ＝２〔同内容可。「家の者」「家族」「子孫」なども可。〕

Ｃ＝６〔同内容可。「しばしば」は「しきりに」「たびたび」なども可。「其ノ」の指示内容（＝「疏広の」）がないものは減点１。〕

問３　Ａ一族の者や旧友を招き宴会を続ける疏広にすべての蓄えを使われてしまう前に、  
Ｂ疏広に田畑と家屋を買い求めさせ、Ｃ子孫である自分たちの取り分を確保しようと考えたから。

文末が「～から（ため）。」になっていないものは減点２。

Ａ＝３〔「疏広にすべての蓄えを使われてしまう前に」という意が示せていればよい。〕

Ｂ＝２〔「疏広に田畑や家屋を買ってもらう」という意が示せていればよい。〕

Ｃ＝５〔「子孫である自分たちの取り分を確保したい」という意が示せていればよい。〕

問４　われあにはいし（て）しそんをおもざらんや。

問５　Ａ子孫には普通に生活できる財産を残しているし、Ｂ必要以上の財産は子孫の志を奪い、過失を招く一因となる。またＣ財産は民衆の恨みを買うものであり、Ｄ自分が皇帝から賜った金を、Ｅ自分とその同郷人との宴会に費やすのは適切だということ。

それぞれ同内容可。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝２／Ｅ＝２

【書き下し文】

　ににり、をしてしてをけしめ、をき、にす。の家にのほるかをひ、しりてて共具す。ること余、広のかに其の人の広のするのにひてはく、「食のにきんとす。しく人の所より、めてにきてをはしむべし。」と。老人ちのを以て広の問１アにを言ふに、広曰はく、「問４に老し子孫をはざらんや。みるにら旧の田有り、子孫をして其のにせしむれば、以て食を共するにり、人としからん。たをして以て余をさば、だ子孫にをふる問１イのみ。にしてければ、ち其のをひ、にして財多ければ、則ち其のちをす。つれ、人のなり。吾既に以て子孫をするく、其の過ちを益して怨をずるをせず。此の金は、の老をする問１ウなり、にしみて郷族とに其のをけ、以て吾が余を尽くすも、たならずや。」と。問１エにいて族人す。

【現代語訳】

　疏広は郷里に帰った後、毎日家人に酒食を用意させて、一族の者や旧友といった客人を招き、自分も共に（酒宴を）楽しんだ。問２（疏広は家人に）しばしば疏広の家に金の残りがまだどれくらいあるかを尋ね、（残りの財産を家人に）促して売り払い（その金でさらに酒食を）用意した。（疏広が郷里の家に）住むことが一年余り（の頃）、疏広の子孫はこっそりと疏広の兄弟である老人で疏広が大切に思っている者たちに（向かって）言った、「今日（父が客人を招いて酒宴する）飲食にあてる蓄えが今にもなくなろうとしている。あなた方から、父を説得し田畑と家屋を買わせてほしい」と。老人たちはすぐにひまな時を見計らって疏広のために疏広の子孫の考えを言ったところ、疏広は（老人たちに）言った、「私がどうして老いぼれて子孫のことを考えないでいようか、いやよく考えているのだ。よく考えると（当然のように）財産として田畑と家屋があり、（我が）子孫を（財産である）田畑と家屋の中で働かせれば、（我が子孫は）そこで衣食を十分に用意することができ、平凡な連中と変わらなくなるだろう。今さらに財産を増やして余分に残すようにすれば、ただ（我が）子孫に怠惰を教える（ことになる）だけだ。（子孫が）賢明で財産が多ければ、まさに子孫の志を損ねてしまうし、（子孫が）愚かで財産が多ければ、まさに子孫の過失（の機会）を（ますます）増やす。そのうえそもそも富める者は、民衆の恨み（の対象）である。私が（我が）子孫を教え諭すことがなくなり、彼らの過ち（の機会）を増やして（民衆の我が子孫に対する）恨みを生じさせたくはない。さらに（酒宴に用いている）金は、皇帝（陛下）が退職する私を労うためのものであり、だからこそ（私が）楽しみとして同郷・一族の人々とともに皇帝（陛下）からの褒美を頂戴して、私の残された日々を（過ごすのに）費やすのも、なんとよいことではないか」と。そこで（疏広の）一族の老人たちはよろこんで納得した。